

本音の コラム



かまた さとし
鎌田 慧

原発に反対してきた、
といっても、なんの言い
訳にもならない。それは
敗戦のあと、戦争には反
対だったんだ、と弁明す
るのに似ている。結局、
戦争を止める力にはなら
なかった。

いまも放射能を漏出し
つつけている原発のそば
で、働いている多くのひ
とたちがいる。そのひと
たちに、「行くな」とは
いえない。だれかが再臨
界になるのを止めなけれ
ばならない。しかし、そ
れが自分の家族なら、力
づくでも「行くな」とい
うだろう。とすると、他
人だから見殺しにしてい
る、ということになる。
十二年前、東海村の核
燃料加工工場「JCO」

恐怖の原発体制

で臨界事故が発生したと
き、取材にいった。土葬
を積む作業をしていた社
員は、「わたしたちがや
るしかない」といった。
会社から逃げだすわけに
はいかないのだ。その後
会社がなくなったが、彼
はどうされただろうか。
東電福島の大事故で
は、何人かが被曝した。
が、これだけですむわけ
はない、とみなが知って
いる。それでも、再臨
界、原子炉爆発の最悪事
態を止めようとしている
仕事に秘かに期待し、見
てみぬフリをしている。
七六年夏、「光も、音
も、臭いも、なにもない。
見えない放射能だけが確
実にあなたを襲う」と雑
誌に書いた。が、原発周
辺の遺体さえ回収できな
い悲惨を、想像できなか
った。反対といいつつ、
原発体制に冒されていた
のだ。(ルポライター)

原発差別城

1970年から現在まで被曝した人42万人以上 原発労働
最も危ない仕事なのに報酬は7万から ピンはねにピンはね
を重ねて物凄く安くなる 守られることなく 保障されること
なく 報われることなく 街の片隅で、冷たい路傍で死んでい
った人が何人いるだろう その上に冷たい視線まで浴びて
その人たちに支えてもらっていた私たちの生活だというのに
原発の事故で何が犠牲になるかを見せつけられた 今まで



ぼんやりとみ
ていたこと
避けていたこ
と

近くに住んで
いた人の捜
索がやっと始

まった 助けを待っていた人もいたに違いない
誰も助けにきてくれなかった一カ月 家族を助けに行けなかつ
た一カ月 地獄の思いをさせてしまった 今福島で必死の作業
必死って必ず死ぬって書く

なぜその人たちは防護服を着ていないの？ そこには誰が
いるの？ どんな作業をしているの？ チリるときにはあんなに詳
しく伝えたじゃないか 原発は差別の城 今崩壊している
それを支えた「私」と共に 公が流布する嘘と共に 多くの生き
物のいのちと共に 南無阿弥陀仏 惟蓮

